
心を開いて～僕と彼女の日常～

翔希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心を開いて〜僕と彼女の日常〜

【Nコード】

N4909H

【作者名】

翔希

【あらすじ】

僕の目線で日常を描く。心の動き、気になるあの人の存在、誰もが被る仮面……。学校と電車内での物語。すべての物事が僕を変えらる。僕は、高校に入ってどんな日常を送ることになるんだろう。

第一話：すべての始まり

夏の暑い日差しの中、僕は顔をあげた。

「っ！ はぁ……」

照りつける太陽の光。腕で目へ届く刺すような光を遮る。ため息が出る。

今は夏休み。僕は高校生。一年生だ。最近、部活が忙しくて、疲れてしょうがない。

「おかしいなぁ……」

僕は、春、コンピュータ部に入った。商業高校の情報科に入ったので、それは当然の流れだと思う。運動苦手だし。でも……

「まさか夏休み中も毎日あるとは……」

どこの商業高校もそうだと思うが、僕の高校も部活動が活発なのだ。夏休み中も、土日以外は毎日あるし、9時から3時まで、昼をはさんで部活をする。それなのにパソコンには二日に一度、触るか触らないかだ。ずっとコンピュータの仕組みや、プログラミング言語について、机に向かって授業の様に説明を受けるだけ。こんなはずじゃなかった。なんで僕はこんな部活を選んだんだろう。

「……暑っ……」

今は学校からの帰り道。照りつける太陽の下、駅まで歩いている最中だ。学校からはバスも出ているのだが、今朝あることに気がついた。……アホといわれても仕方ないかもしれない。定期の期限が過ぎていた。昨日で期限切れ。今日は月曜日。8月1日。気がつかなかった……。ということだがんばって歩いている。今朝はそのせいで遅刻してしまった。顧問にこつてり叱られた。仕方ない。でも、幸いなことに、電車の定期は10月までだから、まだ大丈夫だった。歩く。ただひたすらに。照りつける日差しの中、汗を流しながら、重たい足を一步、また一步、前へ進める。そのうち小さくLOFTが見えてきた。駅の隣に立っている、その大きな商業施設にはよく、

お世話になっている。中は涼しい。ダイヤの間隔は、ほんの数分だが、その数分だけでも涼んでいたい。僕はそう思って、ゆっくり走り出した。駅近くのスクランブル交差点が見えてくる。青信号だ。道路を斜めに切る。自動ドアが見えてくる。少しずつ、少しずつ近づいてくる。もう少し。開いた！

「……えっっ！」

ここはどこだろうか。目の前が真っ暗だ。背中が冷たい……。あれ？僕、横になってる？あ、目も閉じてたんだ……。ゆっくりと目をあける。

「っ！」

照りつける太陽の光。左手で体を起こしつつも、腕で目に届く刺すような光を遮る。ちよつとだけ、気絶していたようだ。そのせいか頭が痛い。変な倒れ方をしたんだろう。その時始めて声に気がついた。

「大丈夫ですか？　おーい！　大丈夫？」

あわてて返事をした。

「あ！　すみません、すみません！」

返事というより、謝ったというべきか。多分この人がぶつかった相手だろう。……。あれ？　笑われてる……。そう、笑い声が聞こえるのだ。それも、可愛らしい笑い方の。頭をあげ、その人の顔を見る。

「翔ちゃん、人通りの多い所で走っちゃだめだよ？」

「麗さん！」

ぶつかった相手は同じクラスの村瀬麗、その人だった。特に親しいわけではない。あまり話したこともないし。今「翔ちゃん」と呼ばれたけど、クラスの皆が僕をそう呼ぶから、特別な事じゃない。しかし、同じクラスの子だったとは、恥ずかしいな……。

彼女も同じ部活をやっている。隣町に住んでいるから、同じ電車になることが多いが、彼女はいつも本を読んでいる。だから、あまり話せないでいる。友人である隼人によると、彼女は成績優秀、運

動そこそこ、容姿は上の中らしい。隼人は女好きだから、よくクラスの子の話をしてくる。……そんなことはどうでもいいんだよ。謝んなきゃ。いや、謝ったけど、もう一度さ。

「ごめん、涼むことで頭がいっぱいで……。あ、そっちは大丈夫だった？」

彼女は、また可愛らしく笑う。

「そっかあ、でも、今度からは危ないことしちゃダメだよ？ それに、ぶつかっただのは、私じゃなくて、大きな女の人。ところで、もう帰るところ？」

ふと腕時計を見る。あ、あと二分で電車が来るじゃないか。帰んなきゃ。

「うん。あと二分で電車も来るし」

「じゃあ、帰り、少し話そうよ。あまり話したことないでしょ？」
嬉しかった。……なんでかよくわからないけど、嬉しかった。

「うん。いいよ。じゃあ急ごっか」

「その前に、立とっか」

ぼくは、座り込んだままだった。急いで立ち上がり、笑ってごまかした。よく見ると、周りからは痛い視線が降り注がれていた。

「じゃ……」

行こうかと言おうとしたその時、救急車の音が聞こえた。

「なんだろうね」

僕は、彼女に対して言った。その時、彼女は、思い出したように「あ、そういえば、さっきまで翔ちゃんのがぶつかっただ女の人も近くにいたんだ。時計見るなり、慌ててすぐ駅行っちゃったんだけど……。その人が救急車呼んだんだ……。あはは」

……あはは、じゃないよ。どうするの、僕もう元気なのに。にしても、その女の人も、僕が目覚めますまで近くにいてくれたっていうのに。救急車がすぐそこで止まる。

「意識不明の男性はどこですか！」

ははは……どうしよう。

僕は、対応に追われることになった。その間も、彼女はしつかり待っていてくれた。結局、二本あとの電車で帰ることになったのだった。

第一話：すべての始まり（後書き）

この小説サイトへの初投稿作品です。
なので、温かい目で見守ってほしいです、はい。
色々ご指摘なども頂きたいと思います。
これからも、よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4909h/>

心を開いて～僕と彼女の日常～

2010年10月23日13時39分発行